保育現場における記録方法の検討

國　京　惠　子

1．研究の背景と目的

保育実践の記録は、会話で済まして消えてしまいがちな問題の消失を食い止める力がある。記録を残すことは、保育の実践を文字で記述し、理論化していくことを可能にすると考える。記録は、記録者の主観によるところが大きいが、活字として残り、省察され、同僚間での共有が可能となり同僚性の構築にも役立てることができる。さらに保育者の専門性の向上に貢献する貴重なツールとなる。

記録方法には多くの方法があり、それぞれに特色がある。どの記録方法も保育の省察を深め、保育の質を高める価値があるといえる。また職場環境で自分たちの使い勝手の良い記録方法へと発展させていく保育集団の力を生む可能性もある。

保育者にとって記録をとることの重要性は周知のことであり、記録をもとに何度も振り返って省察できる意義があるにもかかわらず、保育者たちは、なかなか「書けない、書くのが負担」とつぶやく現状がある。加藤は、「『実践記録』を書くという営みは、いまだ日本の保育実践のスタンダード（一般的なあり方）になっていないというのが現実なのです。」[1] と述べ、実践記録を書くことが、どの園でも日常的に行われていないことを指摘している。確かに、現在多くの支持を受け保育現場で広く活用されているという記録様式はないであろう。

本研究の目的は、保育現場において記録の重要性を認識していながら記録を書くことに結びつかないことに着目し、様々な記録方法を分析し、その特徴や課題について検討する。

2．研究の方法

本研究の方法は、以下の 2 つである。第 1 に、いくつかの記録方式について記録方法を整理し、その記録から生み出される効果、意義や重要性を分析する。第 2 に、それぞれの記録方法における課題を整理し検討する。

3．様々な記録方式の分析

（1）エピソード記述

鯨岡は、2005 年に「エピソード記述」を保育記録の方式として提案した。従来の経過記録や活動の記録、保育日誌でつづられる記録は、書く保育者の主観でありながら、あくまでも客観的に書く形をとり「保育者が、～して～となった。」という書き方であった。しかし、エピソード記述は日常的な保育者間での会話や言葉のやりとりで済まされているエピソード、つまり保育者が体で感じ取ったことや子どもが感じたり思ったりした「意味」をもつ一部分を切り取って保育者の思いを絡めて書く記録である。

鯨岡峻・鯨岡和子は、「保育者が得た経験を周囲の人に分かって欲しいと思うからこそ、描こうと思い立つものです。～中略～単に出来事のあらましを描くのではなく、保育者の目や体を通して得た経験を保育者の思いを絡めて描くもの」[2] と強調する。

そして、思いを絡めて書くことによって保育者

がどのように子どもや周囲の人を受け止めているかが見え、さらに話し合いや職員会で他の保育者にも見えにくい保育が見えるようになるという効果が主張されている。

様式は、タイトル、背景、エピソード、考察からなり、自分の保育を振り返り、質を高めるために必要な目的が以下の4つにまとめられている[3)]。

①保育の担い手である保育者が、子どもたち一人ひとりとのあいだで経験したさまざまな事柄を保育者自身がエピソードに描き出すこと

②その描き出されたエピソードを他の保育者に読んでもらうことを通して、自分の保育を振り返る手がかりにすること

③そのようにして保育者同士の経験を交叉させて、保育の中身を吟味し、園全体の保育の質を高めようと努めること

④そのことによって、子ども一人ひとりを丁寧に保育するという理念の実現に繋げていくこと

矢藤は、「エピソード記録は、子どもの学びや育ちの一瞬を切り取るような方法であり、どのような場面で子どもの育ちの契機が見いだされたかといったことを残しておくのに役立つ。園内研修などでさまざまなケースを出し合うカンファレンスを行うときにも良い材料となるだろう。」[4)] と述べ、討論する手がかりとしてよい材料となり、課題を再認識することにも有用なものとなることを評価している。また、保護者へ子どもの状態を示す際に具体的で伝えやすい利点があるといえる。

しかし、エピソード記述には2つの難しさがあると考える。第1に、日々の記録ではないことである。長期的に保育を振り返ることによって子どもとの関係性を問い直し、保育の質を向上させるには有効な記録であるが、明日やすぐ先の指導計画に直接反映されるように活用することは想定されていない。背景をおさえながらどの一瞬を切り取ってエピソードとするのか、子どもを見る目が問われる。第2に、記述する主体となる保育者の思いや表現で「エピソード」を書くので、文章力・表現力などが保育者に任されることに重荷を感じるのではと考える。事実をありのまま、筆者の感情を表さないで書く従来の実践記録でも、客観的であるとはいえ、その記録の中に保育者の思いや指導の意図は、自然と見えてくる場合もあった。しかし、エピソード記述は保育者の心を揺さぶられた部分に焦点化して詳しく記述し子どもの捉え方を省察するので、表現のしかた一つで、話し合いの方向性に違いをみせる難しさが予想される。

（2）シナリオ型記録

記録を書く意味（保育の質の向上と保育者の専門性の向上につながる）がわかっていてもなかなか書くことができないという現実から加藤は、記録を書けない保育者の3つのタイプ[5)] を以下のように挙げている。

・タイプA―実践のセンスは優れているのに、記録する段階で忘れてしまう

・タイプB―実践を記録する日本語能力に問題がある

・タイプC―実践のセンスが悪いので、どこにポイントがあるかわからない

加藤は、打開策として、タイプAは大切な言葉を「メモする習慣」をつくること、タイプBは保育者が、心を動かされた場面を「事実の記録」として書くこと、タイプCは保育実践のポイントを一点に絞りながら実践を展開し、その点に焦点化して記録を書くことを提案している。

この3つのタイプのBから加藤が考え出したのが、日本語能力に無関係の実践記録を書く方法「シナリオ型実践記録」である。「シナリオ型実践記録」を書く3つのポイント[6)] を以下に示す。

①保育の中で保育者が「面白いな」「不思議だな」「どうしてかな」と感じた事実を、まずは記録する。事実とは、子どもの言葉・しぐさ・表情・行動と保育者の言葉・感情・行動であり、それを劇のシナリオのように書いていく。

②次に書いた記録に、タイトルをつける。書かれた事実に名前を付けることで、実践の意味付け（理論化）が可能になる。

③最後に保育者の感想を書き添える。ここで下手に「考察」などしないことが重要。保育は一話

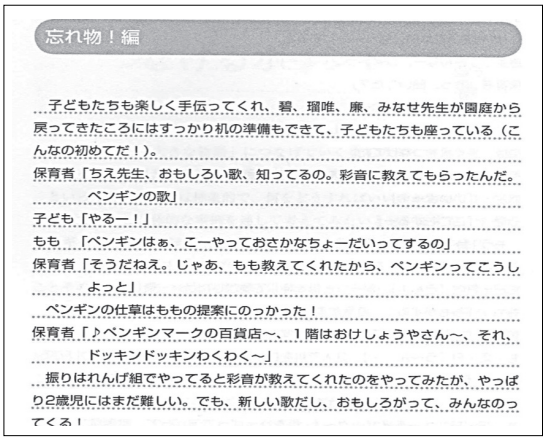
完結ではない。課題を明日に残した記録が子どもと対話する余地を広げる。

このようにしてセリフを言う人の視点から記録が書かれていることから、子どもの本当に望んでいたことを知ることができることが強調されている。さらに実践記録を書き続けていくことで子どもを見つめるまなざしが柔らかくなり、子どもの心の動きに「共感的態度」で臨むことが可能になるという効果もあげられている。そして、子どもの要求を知ることで、子どもを主体とする保育計画を作る営みが自然発生し、子ども参画型の保育実践を導くという。

子ども参画型の保育には子どもの最善の利益を保障する姿勢が最も求められ、一層の意識の高さとモチベーションが求められる。

このシナリオ型実践記録の事例（図 1）は、子どもや保育者の言葉が、一言一句丁寧に取り上げられ、セリフ形式で記述されている。まるで、演劇の 1 シーンを見ているような感覚で実践の様子が手に取るように理解できる構成である。子どもの本当の伝えたい気持ちを読み取ろうという姿勢が、保育者として欠かせない。

ただ記録の量は、丁寧になればなるほど膨大な量になる傾向にある。保育者の日々の仕事は、かなり繁忙であり、その中で書き留める負担は相当なものである。また「聴きとる保育」つまり、発言の多い子の言葉に注視しすぎると、言葉の少ない子どもを不利な状況に追いやったり保育者の都合のいいように解釈したりする危険性も改めて考えていかなければならない。


忘れ物！編

子どもたちも楽しく手伝ってくれ、碧、瑠唯、廉、みなせ先生が園庭から戻ってきたころにはすっかり机の準備もできて、子どもたちも座っている（こんなの初めてだ！）。

保育者「ちえ先生、おもしろい歌、知ってるの。彩音に教えてもらったんだ。ペンギンの歌」

子ども「やるー！」

もも「ペンギンはぁ、こーやっておさかなちょーだいってするの」

保育者「そうだねえ。じゃあ、もも教えてくれたから、ペンギンってこうしよっと」

ペンギンの仕草はももの提案にのっかった！

保育者「♪ペンギンマークの百貨店〜、1階はおけしょうやさん〜、それ、ドッキンドッキンわくわく〜」

振りはれんげ組でやってると彩音が教えてくれたのをやってみたが、やっぱり2歳児にはまだ難しい。でも、新しい歌だし、おもしろがって、みんなのってくる！

図 1　シナリオ型実践記録
（加藤繁美『記録を書く人書けない人』p. 112 から引用）

（3）保育マップ型記録

保育マップ型記録を提案した河邉は、「多くの保育記録は保育の構想の手がかりになっていない。幼児の行動をただ羅列しているだけか、あるいは幼児の主体的行動というより保育者主導の活動に幼児がどう取り組んだかの記述に終始している。」[7] と述べている。日々の保育記録は、「書く」ことに終始していて、自己の保育の省察のためではなく作業の中の一つの書類として残されていき、次の保育計画につながらないことが多いと従来の記録の問題点を指摘している。

保育マップ型記録は、従来からある保育環境を地図化した中に「どこでだれが何をしていたか」を書き表す記録とは違い、幼児の遊びの様子を保育環境図に書き込み指導計画につなげる記録方式である。子どもの活動を空間的に俯瞰し、そこに幼児の遊びの過程をマッピングする形式なのである。河邉は、「前日の幼児の姿を根拠に保育の明日の構想が可視化できる極めて戦略的な方法であり、これを書き続けることは保育の全体を俯瞰しつつ、一つ一つの遊びの状態を捉える眼差しを保育者に求め鍛えるものである。」[8] としてこの記録の有用性を強調している。この記録方式が求める考え方及び視点は、以下の 6 点とされている[9]。

ア．各インフォーマルグループの遊びの経過を可能な範囲で持続的に注視すること
イ．それぞれの遊びの関係性を空間俯瞰的に視野に入れていること
ウ．幼児の言動から「遊びのどこに面白さを感じているのか」「何を経験しているのか」など志向性を読み取ろうとしていること
エ．その際「他者との人間関係」「モノを含んだ空間との関係」を視点にしていること
オ．幼児の志向性の延長上に「次に必要な経験は何か」を読み取ろうとしていること（＝保育者

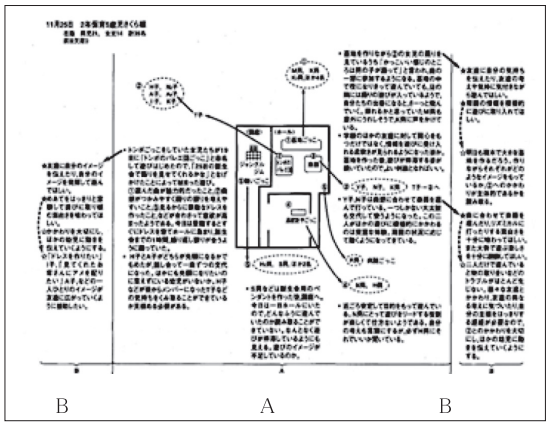


図2　保育マップ型記録
（河邉貴子「明日の保育の構想につながる記録のありかた～マップ記録の有用性」『保育学研究』第46巻第2号．p. 117から引用）

の願い）

カ．「願い」に向けての具体的援助の可能性を示していること

また河邉は、「保育者は保育終了後に、その日の遊びの展開を思いだしながら、保育環境図に遊びのかたまりをマッピングする。紙面の中央A部分（保育環境を図示）にはア～エを視点とした幼児の様子を記録する。そしてAの記述を根拠に長期的展望の中で保育者としての『願い』を明確化し、B部分に視点オ、カを書き込む。Aの部分が『過去』の幼児の言動の解釈を根拠に『その日』の幼児の行動の意味（何に面白さを感じてその遊びに取り組んでいるか、遊びの中で何を経験しているか、等）を解釈する部分、Bはその解釈を根拠に翌日の保育の構想を導き出す部分である。」[10]と説明を加えている。

さらにこの記録の有用性として、「過去」「現在」「未来」の保育の構想を予測し意識づけることによって保育者の幼児理解の視点を深める3つの項目を以下のように掲げている[11]。

1. 幼児の遊びがモノや空間の影響を受けていることへの理解が促進されること
2. 幼児の志向性を「個別性」（個々の遊びのイメージを読み取り、次の遊びへの展開を予測すること）と「共通性」（異なるイメージの遊びからそれぞれが刺激を受け、空間的時間的に共存しながら次の遊びを展開していく過程を予測すること）の2重構造で読み取るようになること
3. 複数の同時進行の遊びのどこに今かかわるべきか、援助の優先性の判断を促すこと

保育マップ型記録は、自由遊びの記録方法であり、遊びが点々とするような子どもが多いクラスでは、この記録を書くことは難しい。また、その遊びと遊びをつなげることも難しい。園庭が広い場合や一人の保育者しかいない場合には、把握しきれない可能性がある。

（4）ドキュメンテーション型記録

ドキュメンテーション型記録は、イタリア北部のレッジョ・エミリア市の保育記録として、注目されてきた記録方法である。実践では積極的に写真撮影をし、従来の文字で表す平面的な記録から、映像を生かしての3次元的な記録のとり方に、関心が多く寄せられている。それは、プロジェクト型記録の一部であると考えられる。

諸川・高橋は、「レッジョ・エミリア・アプローチにおけるドキュメンテーションは、プロジェクト活動の結果や完成された作品のみを記録して表すだけでなく、むしろ子どもの活動や表現に至るプロセスを可視化するための記録です。」[12]と解説している。ドキュメンテーションとは、視覚教材によるものや、子どもたちの言葉の聴き取りや写真などの画像による記録である。

そして、子どもたちの個々の言葉や動きが、さらに制作物など、画像に写り込んだものすべてが、一人の保育者の主観に頼ることなく記録され、また、画像を撮った保育者が意図していない部分（背後に写っている部分）にも、見る側の興味や関心で思わぬ場面を確認できることもあり、想定しなかった子どもたちの展開していく主体的な思考や活動を発見することもできる。その結果、子どもの学びを深めていくための指導や援助を省察できる。

保育の事実・実際を文字でまとめた従来の記録

と違う点は、記録した保育者と同じ次元でその場に居合わせない保育者や保護者やその他の者もドキュメントを共有できることであり、それがこの記録の斬新な点である。

保育場面での具体的な利用として山本は、「子どもも見ることができる場所に貼っておくことで、子どもたち自身が自分たちの活動を振り返り発展させていくとともに、保護者にとってもイメージをつかみやすく、子どもたちを理解し、園と連携・協力していくために効果を発揮します。」[13] と述べている。子ども、保護者、保育者も見ることができ、とかく閉ざされがちな従来の記録（保育者間だけでの利用）からオープンな活用方法になる。写真や子どもが描いたものを中心に子どもの言葉を入れたり、その時の状況などのコメントを付けたりすることにより、保護者が見ても非常にわかりやすく「○○ちゃんは、こんなことしていたんだ。」と視覚的に子どもの活動をとらえることができる効果がある。

ドキュメンテーション型記録において保育者として配慮しなければならないことは、何かができる・できないではなく、保育者が子どものそれぞれの状況や発達に応じた援助を工夫し、子どもが何を求めているのかを常に考えることである。

とくに保育の専門性や遊びを通しての学びや育ちは、形として保護者にとって見えにくいものである。保育サービスの一環としてこのドキュメンテーション型の保育記録を掲示したり、お便りで知らせたりする方法もあり、人々に伝える手段として用いることは有効であると考えられる。

しかし、ドキュメンテーション型記録を取り入れることが人的にも物的にも難しい園もある。職員体制の問題（画像の処理や分析に時間と人を費やす状況下にない）があり、子どもの「旬」の状態を掲示することが難しい場合もある。また、インターネットやメディアなど別の方法を使ってドキュメンテーションを送ることも考えられるが、個人情報の配慮にも課題は残る。

（5）くもの巣型記録

角尾は、「日本の現状に合わせて従来から培ってきた保育法に、新しい方法『プロジェクト型の保育』を導入し、教師の構えの違いを枠組みのより所として 3 層に分けてその構造を計画した。」[15] と述べている。3 層とは以下に示すようなものである[16]。

①どの子どもも学び経験すべき目標内容。担当保育者はクラス全体を掌握しつつ子ども個人にも対応する。［一斉的な保育・指導］

②子ども自身の自発的・自由な遊び。保育者は目標達成を願って環境に事前の準備をする。活動中は、その時どきにとっさの判断が必要。［自由な活動・自由な保育］

③子どもが自分で構想し仲間と協力する活動。プロジェクト型の保育として、子どもが自分で構想し仲間と協力する活動。この場合、保育者の構えは子どもたちの良き仲間であり対話によって交流する。［プロジェクト型の保育］

角尾は③について、「『プロジェクト型の保育』は、レッジョ・エミリアの保育にも示唆を受けており、日本文化のあり様を生かし、更にカッツ（Katz, L）などの『プロジェクト・アプローチ』の保育過程をシステム化し理解しやすくしている点にも学ぶところがあった。それらと一線を画し日本的でありたいとの意味を含めて『プロジェクト型の保育』と名付けた。」[17] と述べている。

角尾は、プロジェクト型保育を提唱する理由として、「子どもは自然な衝動ややりたい気持ちで活動を始めると、生き生きと活動する。興味深く探索し、一定の満足が得られるとさらに探求を持続させ活動する。友だちとよびあってする共同の活動は興味・経験の幅を広げる～中略～教師が子どもの仲間となり興味を喚起するような対話をすれば子どもたちの心の発達に良い影響を与えるだろう」[18] と強調している。

結果として、「予想しきれなかった分野が、見えてくることが分かった。そのため、『友達との関わり』『製作・想像』『リズム・ことば遊び』『文字への興味』など子どもたちに経験してほしいと

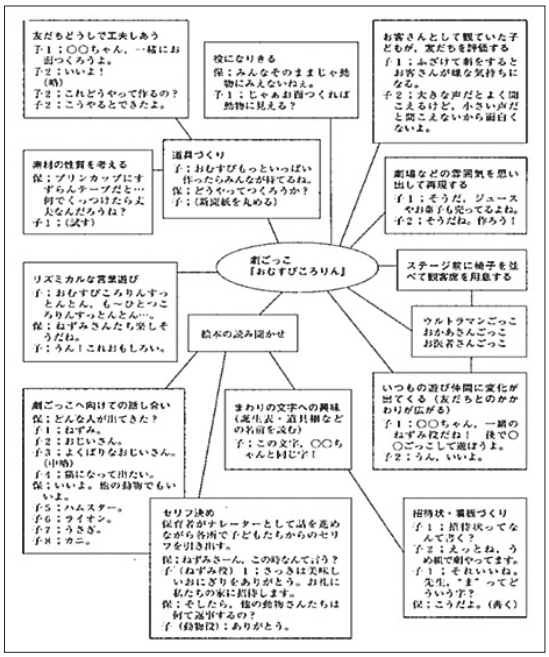


図3　くもの巣型記録

劇ごっこ過程を通して経験した出来事

（角尾和子『プロジェクト型保育の実践研究』p. 15 より引用）

考えられることをバランスよく予想することができた。」[19] と効果が述べられている。

さらに活動後には、前もって作成した図3をもとにして、その日ごとに保育を振り返る材料として役立て、子どもたちが発言したこと、行った動作、考えたことや経験した出来事が詳しく観察できる効果があることを示している。

この記録の長所は、視覚的効果（子どものやりたいことや保育者として子どもに経験させたいことが見える）がある点である。見通しが立てやすく、運動会や発表会等の行事という目的に向かって友だちや保育者とともに意識を盛り上げ作り上げる過程を、全体的にとらえることができる。また保育者がどの部分で補ったらよいかがわかりやすい。発表会の行事などには有効な記録といえよう。

しかし、くもの巣型記録は、全体像はつかめるものの平面的であり記録の順番がわかりにくい。また、時系列でのプロセスがつかみにくいところに難点がある。保育の流れが、どうしてそうなったのか、子どもたちが何に関心をもって楽しんでいたのかを探るなど経緯がつかめないところに課題が残る。

（6）場面記録

宮里は、自分の実践を意識的にとらえ直し、保育の一場面を切り取って記録する「場面記録」を提案している。場面記録とは、「今自分が保育で悩んでいることや気になっている子どもなどに焦点を当てる～中略～、子どものことより、自分がどうすればいいのか悩んでいることを相談する感じでいいのです。あの場面はああいう風にしたけれど、あれでよかったのか、他にやり方はなかったのか等、悩んでいる場面を思い起こして相談するための記録が場面記録です。」[20] と述べ、記録のとり方とまとめ方（図4参照）を以下のように記している。

場面記録のとり方は、保育中の簡単なメモを取り、その日のうちに保育ノートに転記する。できれば一言感想などをつけておく。日付は正確に記録すると説明している。また、場面記録のまとめ

図4　場面記録

（宮里六郎「実践記録のとり方、場面記録を中心に―」『季刊保育問題研究』217号 p. 91 より引用）

方としては、日時・場所・場面・状況など客観的な条件を書き、なぜこの場面を取り上げて記録の意図にまとめ、一度立ち止まり、自分が何をしようとしたか振り返る。意図的に取り組んだ場合は、それを「保育のねらい」に書く。実践過程（子どもの動き及び自分の働きかけと内面）が記録の中心であると記している。

このような記録をもとに、自分の親しい仲間や上司に、保育の状況や過程を説明するだけでなく、自分でこうしてみようと方向性を出してやってみた結果を、これで良かったのかどうか、他のやり方はないかと相談すると保育がもっと深まることが指摘されている。

保育者は、実践の中で、瞬時に対応を考えなければならないときがある。保育経験が多ければ対応の選択肢は広がるが、その結果が、本当に子どもを確かな目で見て子どもの意に即した判断であったのか悩み、頭を抱えることもしばしばである。保育者は、常に考え、迷い悩んでいる。この場面記録は、その悩みを払拭してくれる面がある。そして、書き方を小難しく考えず一場面を記載するところが、実践者には、取り組みやすい記録であるといえる。

しかし、職員間で検討する場を設けられるか、またその場で共感的に受け止められるかなど、相談・討論する場の雰囲気も重要なこととなり同僚性の構築も必要とされる。

4．まとめ

今回検討した記録は、数ある記録の一部である。6つの記録方式の検討により、それぞれに意図があり、記録が記録に終わらず省察や次の指導計画に活かされるように工夫された特徴があることがわかった。保育現場の人的・物的条件や保育内容や記録作成の目的に応じて、記録方式を使い分け、活用していくことが求められる。また、記録をもとに同僚間で話し合う時間や相談しやすい雰囲気などもつくっていく必要がある。

しかし、どの記録方式においても比較的記載する量が多かった。とくに記録を書く時間をとりにくく若い職員が多い幼稚園などでは、量の多い記録を作成することには難しさがある。多忙な保育者が、負担に思わず気軽に書くことができ、同僚間での問題の共有や専門性の向上にもつながる記録の開発が望まれる。

参考文献

1）加藤繁美『記録を書く人書けない人』ひとなる書房．2014．p. 10
2）鯨岡駿・鯨岡和子『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房．2009．p. 18
3）同上書．p. 21
4）矢藤誠慈郎「第11章・実践の質の向上を図る記録のあり方」北野幸子編『乳幼児の教育保育課程論』建帛社．2012．p. 162
5）加藤繁美．前掲書．pp. 34−39
6）同上書．p. 38
7）河邉貴子「明日の保育の構想につながる記録のありかた ～ マップ型記録の有用性」『保育学研究』第46巻第2号．2008．p. 109
8）同上書．p. 111
9）同上書．p. 116
10）同上書．p. 116
11）同上書．pp. 116−117
12）諸川滋大．他『保育におけるドキュメンテーションの活用』ななみ書房．2016．pp. 4−5
13）山本理絵編著『子どもとつくる5歳児保育』ひとなる書房．2016．p. 63
14）角尾和子『プロジェクト型保育の実践研究』北大路書房．2013．p. 12
15）同上書．p. 12
16）同上書．p. 12
17）同上書．p. 12
18）同上書．p. 13
19）同上書．p. 16
20）宮里六郎「実践記録のとり方、生かし方―場面記録を中心に―」『季刊保育問題研究』No. 217．2006．新読書社．p. 88

付記　本稿は愛知県立大学大学院人間発達学研究科の2016年度修士論文として提出した論文の第3章を中心にまとめ直したものである。修士論文の作成及び本稿執筆にあたり指導助言を賜りました愛知県立大学山本理絵教授に深く感謝申し上げます。